幼児にとって、なぜ漢字はかなよりもやさしいのか、もう少し、話を続けましょう。

鳩という文字を分解すると、「九」と「鳥」となりますが、「鳩」「鳥」「九」の中で、どれがやさしいかと聞けば、誰もが「九」が一番やさしいと答えるでしょう。たしかに、字が一番単純なのは「九」で、複雑なのが「鳩」ですから、そう答えるのです。ところが、幼児にとって、もっともやさしいのは鳩です。逆に一番むずかしいのは九なのです。つまり私たちが思っていたこととちょうど反対です。

これまで、私たちは鳩と九という字では、九のほうがやさしい、さらに、ひらがなの「く」はもっとやさしいと考えていました。事実、小学校に入って、最初に教えられるのは“かな”です。ところが、どんな子どもでも、覚えるのに一番時間がかかるのは“かな”です。漢字の九よりもまだむずかしいくらいなのです。

どういうことかというと、実物の鳩は外で簡単に見ることができます。空を飛んだり、餌を食べている鳩を指し示して、あれが「鳩」だと教えれば、幼児は一回で「鳩」という漢字を覚えてしまうのです。ところが、「はと」と教えたのでは、記憶するとっかかりがありません。人の顔でも特徴のある顔ほど記憶に残りやすいのと同じことです。簡単なものというのは、逆に記憶の手がかりがないのです。もし、人間の顔に目も鼻も口もなく、丸い顔の人は誰、丸くて色がちょっと白い人は誰……ということになったら、覚えるのに大変苦労するでしょう。それと同じことです。幼児にとって、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいという理由は、要するに記憶の手がかりが多いからです。

実際に試してください。まだ、文字を知らない二、三歳の子どもさんがいたら、鳩でも燕でもいいですから、まず、写真や絵（実物が一番いい）を見せて、これが鳩、これが燕と漢字を見せるのです。しばらくしてから、もう一度、鳩や燕を見せて、「鳩はどっちかな？」と聞いてください。間違いなく覚えています。四、五歳の子どもであれば、言葉をしゃべりますから、漢字を見せれば、漢字が読めます。

しかし、かなで「はと」とか「つばめ」と教えたのでは、記憶の手がかりが少ないために、その場では覚えでもすぐ忘れてしまいます。「た」や「な」のように、子どもにとって紛らわしい字は、かりに覚えたとしても翌日には、もう区別がつかなくなっているのです。

ポイント：元来、日本語は漢字を使わなくては意味がはっきりしないのです。それを初めはかなで、それから漢字で教えるため、かえって複雑にしてしまっています。最初から漢字で教えればいいのです。「学校」や「三角」や「宇宙」という言葉は、実社会では漢字以外では存在しないのですから。